# ゲルク派における業思想の研究

矢ノ下智也
（D215348）

## 研究の目的と方法

チベット仏教ゲルク派デプン僧院・ゴマン学堂で活躍し、ジャムヤンシェーパ・ガワンツォンドゥ（'Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus: 1648–1721）の直弟子としてラブラン僧院二代目座主を務めた学僧セ・ガワンタシ（bSe ngag dbang bkra shis: 1678–1738）は、『縁起大論』（*rTen 'brel chen mo*）「行：業の解説」（'du byed kyi las 'chad pa）章において、業思想の様々な主題について問答を展開している。彼は、ナーガールジュナ（Nāgārjuna: ca. 150–250）の『根本中頌』（*Mūlamadhyamakakārikā*）、アサンガ（Asaṅga: ca. 300–405）の『阿毘達磨集論』（*Abhidharmasamuccaya*）、ヴァスバンドゥ（Vasubandhu: ca. 350–430）の『阿毘達磨倶舎論』（*Abhidharmakośabhāṣya*）、ツォンカパ・ロサンタクパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357–1419）の『中論大注・正理大海』（*Rig pa'i rgya mtsho*）や『道次第大論』（*Lam rim chen mo*）などで論じられる様々な業思想に立脚し、自身の業理論を展開している。

本研究の目的は、ガワンタシ著『縁起大論』「行：業の解説」章の読解を通じて、仏教業思想に内在する倫理的な諸問題や宗教行為論の特色を明らかにすることである。

## 論文構成

本研究は「序論」、「第 I 部・本論」、「第 II 部・付論」より構成される。「本論」は全 3 章及び結論からなり、「付論」は翻訳研究からなる。

## 序論

序論では、仏教業思想の概要を整理し、『縁起大論』の解題を与えた上で、本研究の目的および方法を提示した。

## 第 1 章 黒白業、善業・不善業

第 1 章では、初期仏教以来説かれる「黒と白が混在した業」（黒白業）という概念やその黒白業と善業・不善業の関係性について考察した。

1.1「黒白業をめぐるガワンタシの見解」では、初期仏教から大乗仏教にわたって頻出する白業、黒業という概念の中でも、「黒と白が混在した業」（黒白業）をめぐるガワンタシの見解を明らかにした。ガワンタシによれば、ヴァスバンドゥの『倶舎論』では、黒白業を相続

（saṃtāna）の観点から区分するのに対し、アサンガの『集論』では「意思」（āśaya）と「実行」（prayoga）という観点から区分するという違いがある。彼はこの相違点を明確にした上で、『集論』に立脚し、黒白業を善業と不善業の二つの場合に区分する。この黒白業の概念は、ガワンタシの業理論において鍵となる。ガワンタシの解釈の中核には、「業の善、不善の決定要因は意思である」という考えがある。

1.2「殺生業をめぐるガワンタシの見解」では、悲（karuṇā）を動機とした殺生と誤認殺生の二つをめぐるガワンタシの見解を明らかにした。アサンガの『菩薩地』（*Bodhisattvabhūmi*）などの大乗仏教論書に描かれる菩薩による悪人殺生について、ガワンタシは『集論』で論じられる黒白業の概念に立脚し、この殺生は意思（bsam pa, *āśaya）が白く、結果的に白い異熟をもたらすことになるので善業であるという理解を示す。さらに、彼は対象を誤って殺害した場合にも問答を与え、デーヴァダッタ殺害の意思を持った人が、意図せずしてヤジュニャダッタを殺害してしまった場合、その人には「殺生業道」という不善なる罪は発生しないが「殺生業」は発生するという理解を示す。『縁起大論』において、ガワンタシは、意思こそが業の善、不善の決定要因や業道の成立要因であるという仏教業思想の本質が、殺生という事例においても例外なく成立することを強調している。したがって、彼は殺生という主題をめぐる問答を展開することで、殺生の肯定や倫理的価値判断を与えようとしているわけではないのである。

## 第 2 章 輪廻と業

第 2 章では、輪廻と業をめぐるガワンタシの見解について考察した。

2.1「ガワンタシによる「輪廻」（’khor ba）の解釈」では、衆生の輪廻、菩薩の再生、声聞の再生、凡夫の極楽への生まれに関する四通りの見解を考察した上で、本研究において頻出する「輪廻」という概念をめぐるガワンタシの解釈を明らかにした。大乗仏教によれば、菩薩は一切衆生を輪廻世界の苦しみから救済するために、輪廻世界へ再生する。ガワンタシによれば、この菩薩の再生を輪廻と同一のものとして理解してはならない。なぜなら、菩薩は自身の意思によって輪廻世界へと再生しているのであり、業と煩悩に束縛され、自立性を欠いた形で再生しているのではないからである。彼の理解に従えば、「自立性を欠いた状態こそ輪廻的生存の本質である」という解釈が成立する。

2.2「人への転生をめぐるガワンタシの見解」では、業と煩悩に束縛される形で、人間へと生を受けた時に、それぞれの有情に個人差が生じることについて考察した。ガワンタシによれば、この議論において重要な役割を果たすのが、「引業」（’phen byed kyi las, *ākṣepakarman）と「満業」（rdzogs byed kyi las, *paripūrakakarman）という二つの業である。『倶舎論』に立脚する毘婆沙師の見解によれば、引業の結果にはいずれかの趣への生、すなわち衆同分（nikāyasabhāga）だけが含まれ、手足や認識器官をはじめとする様々な身体的要素は満業の結果に含まれる。一方、『集論』に立脚する唯識派の見解によれば、引業の結果には衆同分だけでなく手足や認識

器官も含まれ、それ以外の身体的要素、すなわち容姿や背丈などが満業の結果に含まれる。ガワンタシの問答によれば、毘婆沙師と唯識派による見解の相違点は、二つの業の結果に含まれる要素や有情の間に差が生じる過程にある。特に、差が生じる過程に着目すると、毘婆沙師は「加点方式」であるのに対し、唯識派は「減点方式」を採用するという違いがある。「引業」と「満業」という概念それ自体は、インド仏教において存在するが、毘婆沙師と唯識派がその二つをどのように解釈し、両学派の見解の相違はどこにあるのかということは、インド仏教の中では会通されてこなかった。この問題に対しては、ツォンカパの見解やガワンタシの与える問答を紐解くことが解決への一つの糸口となる。

## 第 3 章 聖者の業・凡夫の業

第 3 章では、聖者と凡夫のそれぞれが積む業について考察した。

3.1「聖者の業をめぐるツォンカパとガワンタシの見解」では、真実を直証した聖者はいかにして業を積むのかという問題について考察し、ツォンカパによる新たな解釈を明らかにした。「真実を直証した聖者は輪廻の根源である業の形成者にはならない」というナーガールジュナの見解や「たとえ聖者であっても善業や不善業を積むことはある」というヴァスバンドゥの見解は一見すると矛盾するように見えるが、ツォンカパはこの二つの見解を合理的に理解した。彼によれば、聖者は「輪廻に投げ入れる業」（’khor bar ’phen byed kyi las）を積むことはないが、「輪廻に投げ入れない業」は積むのである。この解釈により、中観思想や瑜伽行思想の中で打ち出された「業」と「聖者」をめぐる様々な見解の統合に初めて成功した。さらに、彼の見解は、後のガワンタシが『縁起大論』において与える問答の中でより鮮明な形で提示されることが明らかとなった。

3.2「凡夫の業をめぐるガワンタシの見解」では、凡夫の積む業の中には、例外的に輪廻の原因にならない業も含まれるというガワンタシの見解を明らかにした。ツォンカパが『道次第大論』において述べるように、凡夫は輪廻の原因となる業を積む。しかし、このことは凡夫の積む業であれば、それは必ず輪廻の原因になることを意味するのではない。というのも、ガワンタシによれば、凡夫である声聞資糧道者が行う布施などの善業は輪廻の原因とはならず、むしろ解脱達成や一切知獲得には不可欠だからである。ガワンタシは、業を「輪廻の原因となるもの」と「解脱達成や一切知獲得の要因となるもの」という二つに区分することによって、その理解を可能にした。彼の理解は「仏教徒はいかにして解脱を達成するか」という仏教における救済論的問いに対する一つの答えである。

## 結論

ガワンタシは、自身の業理論を論じる際、インド仏教文献、特に『倶舎論』や『集論』に立脚し、自身の解釈を提示する。しかしながら、それはインド仏教業思想の単なる模倣を意味す

るのではない。例えば、真実を直証した聖者がそれ以降、どのようにして修行するのかといった問題は、インド仏教の中では様々な見解が存在していたが、それらを矛盾することなく一つの流れとして解釈したのはツォンカパやガワンタシの功績であろう。『縁起大論』の中で、ガワンタシが行ったのは、インド仏教の中では十分に解決し得なかった業思想をめぐる諸問題を徹底的に論じ、解決することである。本研究で考察した事柄は、彼のそうした営みである。ガワンタシの業理論を解明することで、インド仏教からチベット仏教への業思想の発展を見るとともに、業思想をめぐる議論の一つの終着点を示すことが可能となる。

## 付論

付論では『縁起大論』「行：業の解説」章の翻訳研究を提示した。